各地で話題の病害虫

アルファルファタコゾウムシ

学名：*Hypera postica*（Gyllenhal）
英名：Alfalfa weevil

本種はヨーロッパ原産で、現在、ヨーロッパ、ソ連、西アジア、南アジア、北アフリカ、北アメリカに分布し、アルファルファの重要な害虫として知られている。（本誌№12・15参照）

わが国では、昭和57年にはじめて福岡県及び沖縄県で発生が確認された。当初は両県の一部のみに発生し、ウマゴヤシ属植物を中心とした雑草を食害して、農業生産上特に大きな問題は生じていなかった。

60年に佐賀県で発生が確認され、その後、62年に長崎県、63年には熊本・鹿児島・兵庫の各県でも発生が確認された。

発生の拡大に伴って、ウマゴヤシ属以外の植物を加害することが確認されるようになった。

特に長崎・佐賀両県では、ゲンゲの葉・花が食害され、養蜂の採蜜に大きな影響を与えている。

福岡県下で観察された生活史は、12月から5月にかけて産卵し、幼虫は3月ごろから出現し、4月にピークに達する。老熟幼虫は茎葉・地際部などで繭を作って蛹化する。新生成虫は5月に出現し、羽化後しばらくマメ科植物などを摂食した後、樹皮・刈り草・ダンボールなどの下で夏眠する。10月頃から徐々に夏眠から覚め、冬眠することなく4月まで行動する。

防除対策としては、MEP乳剤及びDEP乳剤の散布が有効であるが、ミツバチには特に注意を払う必要がある。

ブドウ枝膨病（えだぶくれ）

学名：*Phomopsis* sp.

昭和40年頃、九州の「巨峰」生産地で、枝の節部が膨れたり主幹部の一部がかいよう状にささくれ立つ症状がみられ、その先の枝が枯死して樹勢が衰弱する被害が出て問題になった。

佐賀県果樹試験場　貞松光男氏提供

当初は、つる割病ではないかと考えられていたが、57年に徳島県果樹試験場が本病の病原が*Phomopsis* sp. であることを明らかにし、佐賀県果樹試験場は62年に病名を「ブドウ枝膨病」とすることを提案した。

新梢に黒色病斑が現われ、枝の肥大につれてひび割れる。2～3年枝では節部が肥大するが、横断面は扁平になる。また、部分的につる割れ状になることもある。4年枝以上の太枝になると粗皮がかいよう状にささくれ立って、症状が進むと木質部が露出してひび割れを生じる。

農林水産省

果実にも黒色病斑が生じ、果実はやや小玉となり、収穫後に脱粒しやすくなる。

葉での病徴は見られていない。

防除対策としては、ベノミル水和剤、チオファネートメチル水和剤を休眠期に、ダイホルタン水和剤を生育期にそれぞれ散布するのが効果的であるとの報告はあるが、防除法に関する今後の研究が待たれる。

アワヨトウ

学名：*Pseudaletia separata*（Walker）
英名：Armyworm

昨年の6月から7月にかけて、アワヨトウが日本海沿岸地域・北海道において大発生し、イネ科牧草、麦類、トウモロコシなどに大きな被害をもたらした。

本種は日本全土のほか、朝鮮半島、中国、東南アジア、オーストラリア、ニュージーランド、東シベリア南部などに分布するが、寒冷地帯では定着しない。

北海道農業試験場　北村實彬氏提供

成虫は体長約18㎜、開張39～43㎜。前翅は淡灰黄色ないし灰褐色であることが多いが、暗色鱗を持つこともある。

本種はしばしば突発的に大発生を繰り返して、大きな被害をもたらしており、その異常発生の原因についてこれまでいろいろな観点から論議がなされているが、推論の域をでていない。

今のところ、本虫が中国大陸などから飛来侵入する長距離移動性の害虫であり、大発生はこの成虫群の飛来に起因するものと推測されている。今後の本虫の生態及び異常発生機構の解明などに関する調査研究が待たれる。

防除薬剤としては、ＤＥＰ剤を若令幼虫時に早めに散布すると効果的である。

チューリップ根腐病

学名：*Pythium irregulare* Buisman

京都府久美浜地方で、チューリップ球根の根だけが腐敗して生育不良を起こし、球根の肥大に影響を与える病害の発生が報告されている。

当初、融雪水による湿害と考えられていたが、大阪府立大学などの研究で、62年に本病の病原が *Pythium irregulare* であることが明らかにされ、病名を「チューリップ根腐病」とすることが提案された。

本病の病徴は、初め根の先端部が茶褐色を呈し、

京都府農業総合研究所　福西 務氏提供

小さな変色部が散在する。後に根の半分まで褐変が広がり、症状が進むと球根付近の根を残してそれ以外は褐変するか、または脱落する。茎葉は葉先・葉縁から次第に黄化して、全体が黄緑色となる。

健全株と比べると株全体が小さく、球根も小さく軽くなる。

ほ場では局部的に発生し、次第に拡大する。

なお、本病の防除対策については今後の研究が待たれる。